

ひよくれんり
5

目次

ひよくれんり 5

思い出のアルバム

書き下ろし番外編
旦那様セラピー

ひよくれんり 5

プロローグ ～幸せの意味～

『幸せ』って、なんだろう？

ふと気になつて、辞書を引いたらちよつとびっくり。

最初に書かれていた言葉は、「運が良いこと、またはそのさま」だった。た、確かに！

私が今幸せなのは、運が良かつたからなのかもしれない。

だつて、親に無理やりセッティングされたお見合いで最愛の人に出会えたんだもの。じやあ、運が悪ければ幸せになれないの？ 幸せって、そんな不確定なものなの？

ちよつと納得がいかなくて、今度は『幸福』を辞書で引いてみる。

「満ち足りていること。不平不満がない状態。楽しいこと」。

うん。こっちのほうがしつくりくるなあ。私の思う『幸せ』な状態って、まさにこんな感じ。心が満ち足りていて、楽しくて。
あれ？ でも……

ちよつとでも不平不満があつたら、それは『幸せじゃない』ってことになるのかなあ？

愛する旦那様がいて、旦那様に愛され……て。（いまだに氣恥ずかしい！）
旦那様との間に、可愛い息子も生まれて……

子どもが赤ちゃんの頃は家事、育児に追われて、本当に大変だつたけど。

そんな息子も今では幼稚園児になり、あの頃よりも手がかからなくなつた。家事にも慣れてきて、時間に余裕を持てるようになつてきた。

時には悩んだり苦しんだりすることもあるけど、楽しい日々を送つてゐる。

そんな生活に、いつたい何の不満を覚えてるんだ？ 贅沢すぎる！ つて、昔の自分が今の自分を見たらそう憤ると思う。

でも、でもね……？

旦那様がお仕事を行つて、息子が幼稚園を行つて、一人で家にいる時にふと込み上げてくる、ある気持ちがあるのです。

それは不平不満というにはおこがましい感情。

自分が贅沢なんだつて、欲張りなんだつてわかつてゐる。

だから口にはできない。誰にも話せない。でも……。

それは心の中に降り積もつて、けつして消えてはくれない気持ちだつた。

私こと柏木千鶴（旧姓は峰岸です）は、三十五歳の専業主婦です。

二十八歳の時、お見合いで旦那様——柏木正宗さんと出会い、結婚しました。

正宗さんは眼鏡がとつても似合う整ったお顔のイケメン高校教師（担当教科は日本史）です。おまけに性格も穏やかで優しくて、一世一代の運を使い果たしたんじゃないのか！ つて思うくらい、私には過ぎた旦那様です。

対する私は平々凡々。ちょっと変わっていることといえば、腐女子……いや、年齢的には貴腐人？ であることかな。身長は百五十二センチで胸は……ささやか。赤ちゃんを産んだあとは少し胸が大きくなつたんですけど、悲しいかな……元に戻りました。

髪はいつも肩上くらいでキープしていて、色素が薄いのは母親譲り。

そんな私達の間に生まれたのが、一人息子の優月です。名前の由来は月がとても綺麗な夜に生まれたから。そしてこの子を産む時にとてもお世話になつた人の名前から一字をもらい、さらに「優しい人になりますように」という願いを込めて、この名前を付けました。

優月が赤ちゃんの頃は……思い返すと本当に大変でした！

初めての育児はわからないことも、上手くできないことも多くて、でも家事もやらなくちゃいけなくつ……とにかく無我夢中でしたね。

大変だったけど、嬉しいことや幸せだなあ！ つて思うこともたつきました。そんな優月も、もう四歳。

一番助かるのは、ちゃんと意思の疎通が図れることがな！

いや本当に、赤ちゃんの頃は何が嫌なのかとか、何をしてほしくてぐずつているのもわからない……そんな時もありましたから。

助かるのはあと、あれ！ 夜にちゃんと眠れること!!

三時間おきに授乳してた頃とか、夜泣きが酷かつた頃に比べたら……。眠れるありがたさを日々噛み締めていますよ。

幸いにして優月は赤ん坊の頃の夜泣きが嘘のように寝付きが良くなつて、一度寝つたら朝までぐっすり！

おかげで夫婦の時間も……つて！ そ、それは置いておいて。

正宗さんを取り巻く環境にも、ちょっとした変化がありました。

二年前、それまで弓道部の顧問だった先生が退職され、正宗さんが次の顧問に就任されたのです。（退職された顧問の先生というのは、高校時代、正宗さんが所属していた弓道部の顧問でした）

運動部の顧問は大変！ 休日も部活のために出勤することが増えました。でも正宗さん自身はやりがいを感じているらしく、忙しくも充実した日々を送つておられます。

そうそう！ 我が家もついに車を買つたんですよ。子どもと一緒に遠出できるよう
にと、優月が生まれた一年後に買いました。以来、正宗さんは電車での通勤から車での
通勤にエンジ。弓道の道具を持ち運ぶことも多いので、車の方が便利なんですって。

充実……というか、楽しそうなのは優月も一緒に。
お友達もできて、幼稚園がすごく楽しいみたいで。幼稚園から家に帰つてからは、よ
く今日はどんなことをしたのかとか、お友達が言つたこととかやつたことを嬉しそうに
話してくれます。

そして私はと、普通……かな？

朝起きて、ごはんの支度をして、旦那様と優月を起こして、一緒にごはんを食べ
て……

二人を送り出してからお皿を洗つて。ちなみに、優月が通つている幼稚園は送迎バス
がないので、行きは正宗さんが送り、帰りは私が自転車で迎えに行きます。

午前中はお洗濯してお掃除して……

結婚したばかりの頃は家事に慣れなくて時間がかかっていたけれど、さすがにあの頃
より早く終わらせることができるようになりました。（手を抜いているわけではないで
すよ！）

だから午後は優月の幼稚園のお迎えまでつぱり時間が空く……なんてこともあります

して。小説を読んだり、BL漫画を読んだりゲームをしたりして過ごしています。

『おいおい、旦那様のお給料ですいぶん優雅な生活してんじゃねーか』って？

私もそう思う。本当に、これでいいのかなあ、申し訳ないなあつて思います。

その度に、「その分家事を頑張ろう！」とか、「旦那様や子どもにとつて居心地の良い
家にするんだ！」って自分に言い聞かせることで、その後ろめたさに目を瞑つてきましたけ
れど……

でもやっぱり思うんだ。

私、このままでいいのかなあ……つて。

春の贈り物

四月になり、息子の優月は年少さんから年中さんへと進級しました。

正宗さんが担任していたクラスの生徒も、同じく二年生へと進級。この学校では二年生になると修学旅行に行くから、正宗さんも秋には引率のため京都と奈良に行くらしい。羨ましいなあって言ったら、「いつか家族で行けたらいいですね」って返してくれた。

うん。本当に、いつか行けたらいいなと思う。特に京都は元々好きな観光地つていのもあるけど、何より正宗さんと新婚旅行で行つた思い出の場所だから。

ただ、正宗さんはお忙しいから、なかなかそんな機会はないだろうなあ。でもいいのです！ 遠出できないならできないなりの楽しみ方だつてあるのです。たとえばそう、今日みたいに……

「おかあさん、おべんとまだー？」

「はーい。今持つていくよー」

おかげを作つて行く先は自宅の庭です。超近場！ ちょうど今ね、庭の枝垂れ桜が満開なのですよ。だから今日は、その桜の木の下で親子三人、お花見をするのですー！

お弁当を詰めた重箱を持つて庭に出れば、桜の下にレジャーシートを敷いて座つていいる旦那様と我が子がいる。特に優月は早くお弁当が食べたいらしく、「はやくー！」と急かしてきた。

はいはい、今行きますよーっと。

「お待たせしましたー」

「おおーー！」

重箱を開けると、優月が歓声を上げた。ふふ、そんなに凝つたものじゃないけど、喜んでもらえると作った甲斐があつたというものです。

一段目には普通の食パンと茶色の食パンで作つた一口サイズのサンドイッチがぎつしり。具は定番のタマゴ、ハム、チーズです。それから二段目には、ミニトマト、ブロッコリー、ニンジン、パブリカと鳥のササミのサラダがたっぷり！

最後の三段目には、アスパラのベーコン巻き、玉子焼き、タコさんとカニさんのウインナーなどのおかずを詰めた。

三人で食べるにはちよつと多いかなー？ とも思うけれど、まあ、余つたら明日の朝ごはんで食べればいいんですよ！

「はりきりましたね」

「えへへ。お花見ですかね！」

桜を見るだけでも楽しいけれど、こうして美味しいお弁当があるとより楽しいじやないですか。

私はお皿におかずやサンドイッチを取り分け、お箸を添えて二人に手渡す。それから正宗さんのグラスにビールを注いで、私と優月はペットボトルのジュースを手に持った。そして乾杯！

さつそくとばかり、サンドイッチにかぶりつく。
「いただきまーす。んむつ、美味しい！」

「へへへー。我ながら良いお味です。

「美味しいですね。このサラダ」

サラダを食べた正宗さんが、そう褒めてくれる。よっし。今度また作ろうっと。

「この間ネットで見つけたレシピなんですよ。お口に合ってよかつた」

「おかあさん、タコさんください」

カニさんワインナーを食べた優月が、今度はタコさんを御所望だ。はいはい、待つてね。

優月のお皿にワインナーを載せたら、ひゅうっと風が吹いてきた。

ざざざざざつと音を立てて、桜の枝が揺れる。地面に落ちた花びらがふわっと舞い上がりつて……

「あ……」

「どうしたのー？」

「……ふふっ」

「はは……っ」

「えー？」

私と正宗さんはくすくすと笑い、なぜ私達が笑っているのかわからない優月はきよとんとして首を傾げている。それがまた可愛くて、私はスマートフォンを持ってきていたればよかったですなあと思った。ベストショット、撮れたのに。

そう考えていると、同じことを思つたらしい正宗さんがポケットからスマートフォンを取り出して、ぱしゃっと優月の写真を撮つた。見せてもらったそれには、桜の花びらを頭に載せている優月の姿がばつちり写つてゐる。完璧です！ 正宗さん。

「優月の頭に、ほら」

正宗さんは撮つた写真を優月に見せた。

「わ！ もう、いつてよねー」

優月はぶう、と頬を膨らませ、自分の頭に手をやると花びらを取つてしまふ。
うん、くすくす笑つてごめんね。だつて、とつても可愛かつたから。
綺麗な桜の花を見ながら家族三人で食べるお弁当はすごく美味しいから、何より楽しい。

「あそんでくるー」

「お庭から出ちやダメよー?」

「はーい!」

大人より先に満腹になつた優月は、家の中に玩具を取りに行つた。

まあ、じつとしてるのも退屈だろしね。桜を綺麗だとは思つてゐるみたいだけど、やつぱり遊んでいる方が楽しいんだろう。

優月が持つてきたのはシャボン玉のセットだつた。黄色の蓋ふたがついたピンク色のボトルに、ミントグリーンのストロー。この間スーパーで買ったものである。優月の最近のマイブームはシャボン玉遊びらしい。

今も、縁側えんがわにちよんと座つてストローの先をボトルの中に入れ、ふううつと息を吐いてシャボン玉を作つている。

ふわふわと飛んでいくシャボン玉、綺麗だなあ。

私達はそれを見守りながら、ゆっくりお酒を楽しむ。

私もたくさんは飲まないけれど、お弁当をおつまみに、梅酒をのーんびりと飲んだ。うふふ、美味しいなあ。

ぽかぽか陽気が気持ち良くなつて……なんか眠たくなつてくる。
春眠しゅんみん曉あかつきを覚えずとも言うし。本当、眠るのに良い季節です。

おつと……。今度は優月は、砂遊び用のシャベルを手にしております。そして、庭の固い地面を掘り始めます。それはもう楽しそうに……樂しいか?

ひたすら穴を掘るだけの遊びです。母には何が楽しいのかさつぱりわかりません。

「何が楽しいんでしょうね?」

「たぶん、単純に土をいじるのが好きなんでしょうね。俺も小さい頃は、よく泥團子どろだんごを作つて遊んでいましたよ」

正宗さんが泥團子どろだんご!? 意外!と思つたのがそのまんま顔に出てしまつたのか、正宗さんは苦笑して「俺にもそういう時代があつたんですよ」と言つた。

「最初は単純に、泥で遊ぶのが楽しくて。ほら、あのべちゃべちゃした手触りと、ひんやりとした冷たさが気持ち良いじゃないですか。あと、綺麗なまんまるに作ることにこだわつたり。……千鶴さんは? 小さい頃は何をして遊んでいました?」

「ええと……」

そうだなあ。子どもの頃は……。

「やっぱりおままごと、ですかねえ。近所の女の子達と。摘んできた草とか花をね、野菜に見立てて砂と一緒に調理したり……って言つても、混ぜたり、水に浮かせたりするだけなんんですけど。そんな風に遊んでいましたねえ」

話しているうちに、日が暮れるまで夢中になつて遊んでいた子ども時代を思い出して、なんだかとつても懐かしい気持ちになつた。

「おかあさん、おかあさん！」

「なあに？」

「すごいのみつけた！ みてみて！ これあげる！」

優月が軽く握っていた手を開くと、そこにいたのは……

ウズウズと動く、大きな毛虫。

「きやあああああ!! ゆ、優月、ポ、ポイしなさいポイ！ 早く！」

「えー？ なんで？ すっごいのに！」

そうだよすっごいよすっごくでかくて気持ち悪いっ！

ああああ駄目だ鳥肌が！ いやあああああ!! よく触れるね、そんなものっ！

「優月、貸しなさい」

パニックに陥る私に代わって、正宗さんが冷静に優月の手から毛虫を取り上げ、ど

こかに放しに行つた。

「おかあさん ミミズさんはすきなのに」

せつかく持つてきたのにと、優月は不満そうにしている。

別に好きじゃないよつ！ 煙を肥やしてくれるのはありがたいと思ってるし、見たり触つたりするのはまあ平気だけど、けつして好きなわけじゃないよ！ でも毛虫は無理!!

ひいいい！ 駄目！ ぞわつとするわ！

もう！ 優月のおばかー!!

* * *

毛虫事件のあと、千鶴さんはずっと機嫌が悪かつた。

今は一人、台所で洗い物をしている。優月が手伝うと言つたが、「いらない」とつづけねて。

それほど毛虫が嫌いなのだろう。まあ、確かに好きだという人の方が少ないか。まして女性ならなおさら。

優月はいたずらをしようとしたわけじやなく、純粹に母親を喜ばせようとしただけの

ようだ。俺は一応、「女の子に虫を贈つたら嫌われるからやめておきなさい」と言つておいた。

「おかあさん、ケムシさんきらいなの?」

茶の間から、台所にいる千鶴さんの様子を気にしつつ、優月が尋ねる。

「そうみたいだね」

優月はしょぼん、と落ち込んでしまう。

喜ばせようとして、裏目に出てしまつたんだものな。あ、そうだ……

俺は小声で優月に問い合わせた。

「優月、お母さんが好きなものはなんだと思う?」

「え……? エエット、ごはん」

優月も内緒話だと察したのか、小声で答える。

「つ……まあ、そうだな」

確かに千鶴さんは食べることが大好きだ。だが息子にまで即答されるとは……いかんいかん。笑いを堪^{こら}えるのに必死になつてしまふ。

俺はこほん、と咳払いしてから、優月を諭^{さし}した。

「いいかい、優月。プレゼントはね、その人が欲しいもの、好きなものを贈るんだよ。さて、お母さんが一番好きな食べ物はなんだろうな?」

「イチゴ」

優月は右手を上げて小声で答える。

そう、苺は千鶴さんの大好物だ。

「今からお父さんと一緒に苺を買ひに行こう。それで、お母さんにちゃんと『ごめんなさい』って謝るんだ。できるな?」

「はい。ぼく、ちゃんとごめんなさい、する」

善は急げと、俺は台所にいる千鶴さんに「優月と散歩に行つてきます」と声をかけて、息子の手を引いて近所のスーパーに向かった。

スーパーまで歩くのは、腹ごなしにもちよどいい。

道端にはタンポポも咲いていて、改めて春だなあと思った。

優月もどうせなら、こういうものをプレゼントすればよかつたのにな。

「まあ、毛虫はよくなかったけど、お母さんに贈り物したいと思つた気持ちは偉いぞ、おかあさんにもみせてあげようとおもつたの」

優月

そんな気持ちを大事にして、心のまっすぐな子に育つてほしい。

そう褒めると、優月は頬を緩めでてはにかむ。

「えへへ。あのねー、おつきかつたよね、あのケムシさん。ぼくびっくりしてね、で、おかあさんにもみせてあげようとおもつたの」

話している間、優月の表情はくるくる変わる。毛虫を見つけた時のこと話をすびつくりした顔、得意げな顔、それから千鶴さんに怒られてしまいんぱりした顔。この子のこういう素直なところは、千鶴さんにそつくりだ。

「ねーねー、おとうさん」

「ん？ なんだ？」

「おとうさんと、おかいものだね！ エヘヘ、ヘヘー！」

そういえば、二人でスーパーに行くことなんて滅多にないもんな。うん、お父さんも嬉しいよ。

スーパーで、優月が「これがいちばんおいしそうなの！」と言つて選んだ苺をワンパック買って、家に帰る。

千鶴さんは茶の間でテレビを観ていたけれど、心ここにあらずでソワソワしていた。きっと、さつき拗ねてしまつたこと、優月を怒つてしまつたことを気にしているのだろう。

そして優月も、帰るまではごめんなさい、と言う気満々だったのに、いざ千鶴さんを前にするともじもじし始めた。

「ほら、行きなさい」

そんな息子の背をぽんと押してやると、優月は苺のパックを抱えて千鶴さんに近寄つた。

「お、おかあさん！」

「優月……。おかえりなさい。どうしたの？ その苺」

「あのね、あのね、これ、プレゼントなの。ケムシさんみせてごめんなさい。ごめんなさいの、プレゼントなの」

「苺……」

「千鶴さん、優月は千鶴さんが喜ぶと思って、ケムシを持つていつたんですって」「プレゼントはね、好きなものをあげるんだよっておとうさんいつたの！ だからね、

イチゴ、どーぞ！」

「優月い……、正宗さん……」

千鶴さんの顔がくしやつと歪む。

「ううう！ お母さんもごめんねえええ！」

そしてがばっと、優月を抱き締める。

「怒つてごめんね。ありがとう、嬉しい。すっごく嬉しいよ！」

「おかげさん、こんどケムシさんいたら、ぼくがエイツしてあげるね」「優月いいい！」

ああ。優月の言葉で、千鶴さんの涙腺が決壊した。
まったく、しようがないなあ。

愛おしさが込み上げてきて、ついつい口の端が緩んでしまう。
俺は二人に近付くと、奥さんと息子をそっと抱き締めた。

「……ま、正宗さん？」

「つい」

「おとうさんも、ぎゅーだ！」

きやつきやつと、嬉しそうに優月が笑う。

「ついて、もう……」

苦笑しながらも、千鶴さんはぎゅうっと抱きついてくれる。
なんとも微笑ましい家族の姿だった……のだが。

「あっ」

突然、千鶴さんが声を上げた。

「苺！ 潰れてる！」

「あっ」

「ああ……」

優月が持っていた苺が、抱き合った拍子にぐしゃりと潰れてしまった。

「せっかく買つてきててくれたのに。でも、潰れてても美味しいといただきます！」
千鶴さんはそう言うなり、台所に苺を洗いに行く。そして皿に盛つて戻つてくると、
潰れた苺を一つつまんで、ぱくりと口に含む。

「んん～！ 美味しい！ 今まで食べた苺の中で一番美味しいよ、優月」

「やつたあ！」

「優月もほら、アーン」

喜ぶ優月の口に、千鶴さんは苺を一つ運ぶ。

それから、俺の口元にも。

「正宗さんも。はい、どうぞ」

「いただきます」

潰れてしまつた苺は、家族の想いがぎゅうつと詰まつていて……

「……美味しい」

千鶴さんの言う通り、今までに食べたどんな苺よりも美味しく感じられた。

端午の節句の日に

雲のない晴天の日。住宅街にぽつぽつとあがっている鯉のぼりが、気持ち良さそうに空を泳いでいる。

その日、私は朝からごちそう作りに勤しんでいた。

今日は五月五日、こどもの日なのです！

毎年この日は実家の両親と弟、それから友人達をうちに招いてお祝いをしています。

我が家は鯉のぼりはあげずに、実家の両親に買ってもらったケース入りの兜飾りを出します。ちなみに兜は戦国時代の武将、伊達政宗公モモデルです！ 私が一番好きな戦国武将だし、兜のデザインもカッコイイし、それに……。

名前が、ね。漢字は違うけれど、旦那様と同じだから。男の子が生まれたら絶対にこの兜！ って決めていたのです。

初節句の時に買ってもらつたものだから優月が選んだわけではないけれど、優月もこの兜飾りが大好きなんです。毎日幼稚園に行く前に兜の前でニコニコしたりしてると、オルゴール（ケースにオルゴールが付いてるんです）を回して、一緒に『鯉のぼり』を

歌つたりしています。熱唱です。

兜の前立ての弦月。「これはお月様なんだよ！」って話して以来、自分の名前と同じだ！ って親近感を覚えているようですし、「『伊達政宗』の『政宗』は、漢字は違うけど、お父さんと同じ『まさむね』なんだよ！」って話してからは、「おとうさんといつしょ！」って、ますます好きになつたみたい。優月がこれほどまでに愛着を持つていてことを知つて、両親はすごく喜んでいたつけな。

そんな優月は今何をしているかというと、兜飾りを飾つている和室で熱心にある物を作っています。それは……

「おかあさんん！ できたー！」

おっ、完成したみたい。優月が台所にたたつと駆けてきました。

その小さな頭に載つてるのは、新聞紙で折つた兜！

「おお～、上手にできたね」

「へへ～」

優月は得意げに笑つています。この間幼稚園で折り方を教わつたんですつて。今日はこれを被つてお祝いパーティーに出るんだと、はりきつていました。

「おかあさんも、できた？」

「うん。ごちそいいつぱいできたよ。優月の好きな唐揚げもあるからね」

「きやー！」

歓声を上げた優月は、そろーり、そろーりと食卓に近付く。そこに揚げ立ての唐揚げがあるのです。

「ほんとうに、おいしく、できたかなー？」

「…………」

「カクニン、したほうがいいんじゃないかなー？」

こつ、こいつ……！

あくまで「自分はみんなのためを思つて言つているんだよ?」の態で、遠回しに味見を要求している！ 要するに食べたいんでしょ！ 今！

「食べたいなら食べたいって言いなさいよー！」

「んー、カクニンしてあげてもいいよ?」

もー！ そんな言い方するなら……

「確認ならお母さんがします」

私はツーンとそっぽを向いて、熱々の唐揚げをひよいつと口の中へ入れる。あふつ。んー、外はカリカリで中はジューシー！ 我ながら美味しいつ。

「美味しいー。よし、確認オッケー！」

問題ありませーん。

「ああああ……」

おお、優月が悔しそうな顔でこちらをじーっと見つめてくる。
もし、そんな顔も可愛いなあ。

「お母さんに言うことは？」

「……っ、ください！ ぼくにも、からあげー！」

最初から素直にそう言つていればよかつたのだよ、優月クン。

「はい、一つだけね？ 熱いからちょっと待つてて」
唐揚げを一つつまみ、ふうふうを息を吹きかけて冷ます。それを、大きく口を開けて待つている優月に……はい、どうぞ。

「んんー！」

優月はもぐつ、もぐぐつと咀嚼そしゃくして、ふにゃーっと顔を綻ばせた。

「うまー！」

「ほつほつほ、美味しいかー、そーか」

「とつてもおいしー！」

えへへ。こんなに喜んでもらえると、嬉しくなつちやうよ。
こういう時、家族の笑顔が主婦の原動力なんだなあつてしまひ思つう。

「ようし、それじゃあ優月。兜かぶとも仕上仕上がつたし、お母さんのお手伝いしてくれれる？」

優月にお箸やお皿を運んでもらって、和室のテーブルに料理や飲み物が並んだ頃、お客様がいらっしゃいました。

お茶の間で新聞を読んでいた正宗さんが立ち上がり、優月と一緒に玄関へお客様をお出迎えに行く。最初にやつて来たのは、実家の両親と弟だった。

お？ 今優月が「きやー」と歓声を上げたな。きっとプレゼントをもらつたんだろう。こどもの日には、両親と弟が優月にプレゼントを買つてきてくれるのだ。

「おかあさーん！ おじいちゃんとおばあちゃん、ひーちゃんからもらつた！」

新聞紙の兜飾りを被つた優月が、嬉しそうにプレゼントを抱えて走つてくる。

私は和室に入つてきた両親と弟に「いらっしゃい！」と声をかけてから、優月に「よかつたね！ お礼はちゃんと言つた？」と尋ねた。

「うん！ いつた！ あけていい？」

「ビリビリは駄目よ。やさしく、開けてね」

「はいっ」

元気よく良く返事をして、優月がラッピングの包みをそつと開けていく。両親からもらつたのは絵本だった。この子は読書家の正宗さんに似て絵本が大好き。包みから出て

きた絵本をぎゅっと胸に抱いて破顔してから、改めて「ありがとうございます！」とお祖父ちゃんお祖母ちゃんにお礼を言う。

「優月、俺のも開けてみな」

そう声をかけたのは、私の弟のひばり。現在は東京の企業に勤めている。ちょっと童顔のため、今でもたまに大学生に間違われるらしい。

優月にとっては叔父に当たるけれど、優月は「おじちゃん」ではなく「ひーちゃん」と呼んでいる。

ありがたいことに雲雀は優月をとても可愛がつてくれていて、会う度にプレゼントをくれる。優月の大好きな叔父さんだ。

「うんっ」

同じくそつと開けた雲雀からのプレゼントは、缶箱に入ったお菓子のようだつた。「わあ！ おかし！」

「東京で評判の店のなんだ。お母さんと仲良く食べるんだぞ」「うん！」

あ、私も食べていいのね。ふつふつ、楽しみだね！

今日のデザートはあるから、このお菓子は明日のおやつにいただきましょう！ 両親と雲雀が席に着いたところで、次のお客様が！

「あつ、ろうちやんたちだー！」

優月が勢い良く駆け出して、玄関までお出迎えに行く。正宗さんも苦笑してついていき、二人でお客様を和室に案内してきた。

「やー、遅くなつてすみません」

一声かけて入ってきたのは幸村真さん。

正宗さんの学生時代からのご友人で、同僚でもある。幸村先生は正宗さんの学校の養護教諭なのだ。

「お久しうぶりです」

そしてもう一人、水無月隣さん。

相変わらず着物姿が良く似合う美青年でいらっしゃる！ 現在、日本画家として活躍されている彼は、幸村先生の恋人だ。ええ、つまりお

二人は同性同士のカップルなのである。

ちなみに優月の名前の由来、月の字は隣さんからいただいたのです。この子を産む時、とても力になつて下さったから。

お二人とはお互いの家で食事をしたり（幸村先生と隣さんは今一緒に暮らしているのです）、一緒に遊びに行つたり、時には旅行に行くこともあり、親しくお付き合いさせてもらつていて。もう一つの家族……みたいな存在だ。

それは実家の両親も知つていて、初節句の時に「幸村さんと水無月さんにも来ていただいたら？」と提案してくれたのも実は母なのです。

正宗さんは中学生の時、ご両親を亡くされている。その後育ててくれたお祖父さんも亡くなつて、近しい親族がいない。その代わりと言つてはなんだけど、幸村先生と隣さんにも『家族』としてお祝いに参加してもらつたら？ と。以来、端午の節句には峰岸の家族と、幸村先生と隣さんが顔を出してくれるようになった。『家族』に祝つてもらえて、優月はとっても幸せそうだし、私も正宗さんも幸せだ。

「千鶴さん、幸村と水無月からこれをいただきましたよ」

「わあ！ ありがとうございます！」

正宗さんが私に手渡してくれたのは、和菓子屋さんで買ったと思しき包み。中身はわかつています。本日のデザート！ 柏餅です！

事前には、隣さんから連絡をいたいでいたのですよ。今日の柏餅、自分が用意するから、つて。隣さんお気に入りの和菓子屋さんのものなんですって！ ご実家が高級料亭の隣さんの舌は肥えているからなう。楽しみです！ さて、全員揃つたのでお食事にしましょうか！

朝からはりきつて作つたごちそうです。今日のメニューはお祝い事の定番、お赤飯！ それからイナダのお刺身。イナダはブリの幼魚です。成長するに従つて呼び名が変わるところから『出世魚』と呼ばれ、縁起が良い物とされています。

そして筍の^{たけのこ}お吸い物！ 筍のようすくすく育ちますようにつてことで、端午の節^{たんご}にはよく筍料理が出されるんだとか。うちもそれに倣つて、必ず筍を食べます。あとは優月の好きな鶏の唐揚げに、豆腐と水菜、大根の上に刻み海苔をちらした和風サラダ。それからうちで漬けたキャベツとニンジンのお漬物も出しました。

大人達はお酒で、優月はジュースで乾杯つ！

料理に舌鼓^{したづづき}を打ちつつ、おしゃべりに花が咲きます。

あつ、幸村先生がお母さんにお酌を……！ すみませんつ、ありがとうございます。

イケメンにお酌され、お母さんは上機嫌だ。お母さん、幸村先生と朧さんのこと気に入つてゐるからな。そしてお返しにと、お母さんは幸村先生のグラスにビールを注いだ。近況とか、ご近所の噂話なんかも交え^{まわ}て、楽しそうに笑い合つている。(ちなみにお母さんと幸村先生の声が一番大きい)

正宗さんはお父さんとお話し中。二人とも静かに話してゐるけれど、お父さんはにっこにこと嬉しそうだ。お父さん、正宗さんのこと大好きだからなあ。一度正宗さんにそれを言つたら、正宗さんははにかみながら「嬉しいです」と言つてくれて……

その顔を見た時はマジで鼻血が出るかと思ひました。つい、義父と婿のカツプリンゲもありか！ なんて腐つたことを考えてしまいましたよ……

お、朧さんが雲雀に絡んでいるぞ。朧さん曰く、雲雀は私に似てて面白いんだとか。

(どういう意味ですか！)

雲雀がむつとした顔をすると、剣呑^{けんのん}な空気を察知した優月が「なかよく！」なんて注意するものだから、雲雀は一転デレッとした表情に。(甥^{おの}っ子に怒られても嬉しいのか弟よ……)

朧さんはそんな雲雀の様子を見て、ますます楽しげな笑い声を上げた。

そしてたぶん雲雀に見せつけるため、「優月、来い」と両腕を広げ、「きやー」と嬉しそうにやつてきた優月をぎゅうっと抱き締める。優月ははしゃいで、「ろうちやん！」とハグを返した。

朧さんは優月が赤ちゃんの頃からしょっちゅう遊びに来て下さつてて、この子の世話をよく手伝つてくれたのです。

物心つく前から傍^{そば}にいて遊んでくれた綺麗なお兄さん^{おに}さん^{さん}のことを、優月は心から慕つてゐる。朧さんもこの子をとても可愛がつてくれていて、まさに相思相愛^{さうししそうあい}。それはもう、時に恋人の幸村先生も妬いちやうほどの、お父さんの正宗さんも危惧^{きぐ}するほどのラブラブっぷりです。

二人のいちやいちやを見せつけられた雲雀は悔しそうに、いや、羨ましそうに朧さんを睨む。ああ駄目だよ雲雀。朧さんはそういう反応が見たくてやつてるんだって！

案の定、隣さんは機嫌良さそうにフフンと笑っている。うう、相変わらず意地悪な人だ。

だけど……、ごめん！ 弟よ。

(意地悪な年上美青年に苛められちゃう弟キヤラ……美味しいな！)

こんな時でもついつい妄想の翼で飛んでしまう。それが腐女子の性なのです！

そんな楽しい食事会を終え、デザートに美味しい柏餅をいただいたあと、優月は雲雀と隣さんと一緒に庭で遊び始めた。新聞紙の兜を被つて、武将ごっこをするんだって朝からはりきっていたなー、そういうえば。

面白がった隣さんが優月に口上を教えて、雲雀が新聞紙を細く丸めて『刀』を作り、優月は「われはだてまさむねなりー！」なんて叫んでいる。ふふふ、小さな独眼竜だ。

正宗さんと幸村先生とお父さんは、三人でお酒を飲みつつ碁盤を開んでいる。

幸村先生は最近になつて囲碁を覚えたらしく、お父さんを参謀に正宗さんと真剣勝負！ さてさて、今日こそ正宗さんに勝てるかな？

そして私はというと、お母さんと一緒に台所でお皿を洗つていた。最初は一人でやるつもりだったんだけど、お母さんが「私も手伝うわ」と言つてくれたのだ。

お母さんは囲碁がわからないので、男性陣の勝負を見ているよりお皿を洗つての方が

いいんだって。食器の量が多かつたので、正直助かる。

「ゆーちゃん、大きくなつたわねえ」

「うん。本当、子どもの成長は早いなあつて思うよ。ちょっと前まで赤ちゃんだつたのにね」

きゅつきゅつとスポンジでお皿を洗いながら、私はしみじみと息を吐く。

再来年には小学生だもん。本当、早いなあ……

「ふふつ。顔立ちは正宗くんに似てるのに、中身はまんま、あんた似よねえ」「うつ……」

そ、それはよく言われる……！

いや、うん。自分でそもそもそう思うし。特に食べるのが大好きなところとか、美味しいものに目がないところは私にそつくりですよ！ 外見が正宗さん寄りなのがせめてもの救いです。

どうかこのままお父さんに似たイケメンに育つてくれよ！ と思います。でも外見が正宗さんで中身が私とか、それはそれで残念な気もしますが……。ええと、とにかく！ (元気に育つってくれたら、それでいい)

イナダがブリに、鯉が龍になるように『出世』してね！ とまでは言わないけれど、筍みたいにすくすく、健康に育つていつてくれたらいいなあと、母は思うのです。

端午の節句の夜は、菖蒲湯に浸かります。実家ではそういう習慣はなかつたんだけど、優月が生まれてから、ご近所の高橋さんのお祖父ちゃんがね、庭で育てている菖蒲を分けて下さるようになつて。今年も菖蒲をいただきました。

これに入れば、熱い夏も健康に過ごせるんだって。菖蒲は良い匂いがするし、身体もぽかぽかと温まるから、結構気に入つていて。

今は正宗さんが優月と一緒にお風呂に入つていて、お風呂場からは楽しそうにはしゃぐ我が子の声が響いてくる。「かくごー」なんて声も聞こえてきて、たぶん、菖蒲の葉を剣に見立てて遊んでいるんだろう。武将ごっこが気に入つたみたい。昼間も、雲雀を相手に勇ましく戦つていたようだし。男の子だねえ。

そして二人が上がつたあと、入れ替わりで私がお風呂に入る。優月は正宗さんが寝かしつけてくれる予定だ。

「上がりましたよ」

お茶の間で二人を待つていたら、湯上がりの正宗さんが頭にタオルを被つたまま、そろ知らせに来てくれた。

「はふう……。何年見えていてもドキッとしちゃう、お風呂上がりの正宗さん。寝巻の浴衣からちらりと覗く鎖骨や、濡れた髪の張り付いた首筋とか……！歳を重ね、さらに

色気を増したような気がします。

「はい。じゃあ私もお風呂に……」

「千鶴さん」

「それ違ひざま、ぱしりと手をとられ、正宗さんの口が耳元に近付く。

「……部屋で、待つてますね」

低い声で囁かれた言葉に、かあつと体温が上がつた。

『部屋で待つている』は、私達の間で使つてゐる隠語……のようなもの。普段寝てゐる寝室ではなく、部屋——ここでは私の使つてゐる部屋を指す——で待つてゐるというのは、つまり……

ふ、夫婦の営みをしましようね、つてことなのだ。

いつも私達親子三人は、寝室のダブルベッドで川の字になつて寝てゐる。だからその、さすがに子どもが寝てゐるベッドでそういうことをするのは……ということで、セックスは主に私の部屋か、時々お風呂場でもするようになった。

私がお風呂に入つてゐる間に、正宗さんは優月を寝かしつける。あの子は寝付きも良いし、今日はいっぱいはしゃいで疲れてゐるだろうから、すぐぐっすり寝入るだろう。そうして、正宗さんは私の部屋で待つてゐる……と。そういうことを、するために。これが初めてなわけじゃないし、今までに何度も身体を重ねてきたのに……

(……む、胸が……)

恥ずかしくて、緊張する。そしてこれから始まることへの期待とで、胸がドキドキと高鳴るのは……
何年経つても、変わらないのだ。

『部屋で待っている』と言われた夜は、いつもより念入りに身体を洗う。

隅々まで洗って、ムダ毛の処理もばっちりして、お風呂に浸かつた。

あんまり待たせちゃ悪いかな……と急く気持ちと、良い匂いのする菖蒲湯にもう

少し浸かつてみたい気持ちとが交錯する。

「はふ……」

温かくて、気持ち良いお風呂……

そして湯上がりには、旦那様ともっと気持ち良いことをするんだな……って思うと。

「きやあー」

胸がいっぱい、いてもたつてもいられなくて。私はざぶん、とお湯の中に潜つた。

「ぱはっ」

そ、そろそろ上がるかな。

正宗さんも、待つますしね……

お風呂から上がつて、身体に大きなタオルを巻き付け、洗面台に向かってドライヤーをかける。我が家にはドライヤーが二台あつて、もう一台は寝室の鏡台の上にあるんだけど、そこでかけちやうと優月が起きちゃうからね。

「……よし」

そして下着や寝巻は……つけない。す、すぐに脱ぐことになるからね！

だから私は裸にタオルを卷いただけの恰好で二階に上がつた。

私の部屋に行く前に、寝室の様子を窺う。扉を開けてちらつと覗くと、照明を落とした室内で、ベッドの上から優月の規則正しい寝息が聞こえてきた。

それにはつとして、いよいよ私の部屋へと向かう。

そろ一つと襖を開けると、正宗さんは長座布団に座つてくつろいでいた。手には本を持つつている。あ、あれは……！

「ちよつ！ 正宗さんそれ！」

「おかえりなさい、千鶴さん」

いやそんなニコニコ顔でお出迎えされても騙されませんよ！

それ、私の本（B L漫画）じゃないですか！

また勝手に読んで……！ 恥ずかしいからやめて下さいって言つたのに！

「ついつい」

「ううう……」

結婚後に趣味がバレて以来、正宗さんは私の腐った嗜好にも理解を示して下さる。それは本っ当にありがたいのだけれど、私の愛蔵本を読むのは勘弁してほしい。え？ 読まれるのが嫌ならちゃんと隠せって？ これ読まれたら死ぬ！ レベルのハードなやつは鍵付きのブラックボックスに隠してあります！ こ、これくらいならいいか……とか、正宗さんも引かなかつたし……というレベルの本は、カバーをかけてそれとわからないようにして本棚にしまっている。その本棚のやつを、読まれちゃうんです。

心底嫌なわけじゃないけど、こう……

「BLって、男子高モノが多いんですね」

いたたまれないんだよ！

旦那様にBLについて語られると、いたたまれない気持ちになるんだよ！
エロ本見つかって「あんた巨乳好きなの？」って母親に言われる男子中学生ぐらい、いたたまれない気持ちになるんだよ！

ちなみに正宗さんが今読んでいるのは、男子高を舞台にした後輩×先輩モノです。
うん。男子高って腐女子ふじょしにとつてはパラダイスみたいなもんだからね。

「……まあ、男子高に行つた知り合いも、学校に同性のカップルがいるって言つてましたが」

「えっ。それ詳しく！」

私が正宗さんに擦り寄ると、彼はくすくすと笑い声を上げて言つた。
「やつと来てくれた」

「あつ……」

と声を上げた瞬間、正宗さんの整つた顔が間近に迫り、私は目を瞑つむつて口付けを受ける。

正宗さんは持つていた本をテーブルに置き、私を抱いたままゆっくりと後ろに倒れる。私は仰向けに寝転がる彼の上に乗る形になつた。その体勢で、何度も何度もキスをする。ふつと唇を合わせるだけのキスも、互いの舌を絡め合うキスも、何度も……

「ん……ふ、ふぶ……あつ……」
正宗さんとするキスが好き。互いの唾液だえきが混じり合つて、とてもいやらしい。熱が高まって、ゾクゾクッと背筋に快感が走る。このままとろけて、どうにかなつてしまいそう……

「んつ、んんつ……」

キスに酔つている間に、正宗さんはきつく卷いていた私のタオルを取り払つてしまつ。下着すみき一つ身につけていない身体が、彼の目前に晒される。

「ひつ……」

彼は私の胸の頂をくりくりと弄った。私のソコは子どもを産んで母乳で育てて以来、前よりも少しだけ大きくなっている。その頂をつままれ、こねられると……

「あ……っ、あう……っ」

ゾクゾクッと、下肢が震えてしまうのです。それをわかつていて、正宗さんは執拗に

ソコを攻め立てる。

ところ……っと、秘所が濡れてきたのがわかる。ついもじもじとしてしまって、気になつて。私はそつと、自分の指で秘所に触れた。ねつとりとした襞の奥を指で撫でると、ソコはもう滴でしとどに濡れている。

「あつ……」

「自分で弄るなんて、いけない人だ」

正宗さんはにっこりと嗜虐的な笑みを浮かべた。

「俺に胸を弄られて、自分でソコを弄つて、気持ち良い？」

「ふあつ……ご、ごめんなさ……」

弄ろうとしたとか、そんなんじゃなくて……

でも、だって、正宗さんが全然、ココに触つてくれないからあ……

「だめ、お仕置きです。自分で弄つて、イッて下さい」

「そつ、そんなんあ……」

正宗さんは時折、意地悪になつてSツ気全開で私を苛める時がある。今日はどうやらそのスイッチを押してしまつたらしい。でも……

「恥ずかしい……」

と言いつつ、そんなことを強要される状況に快感を覚えてしまう私も大概ですよね！すみません！

正宗さんから身を離し、私は恐る恐る足を開いて彼の前に秘所を晒す。うう、恥ずかしい。

でも、身を起こして胡坐をかく彼が「ほら？ やつて？」と目で訴えるから……

「んつ……」

私はそつと、自分の指で秘所に触れた。

「はあ……っ」

見られている。正宗さんの前で、こんなことをしている姿を。でもその羞恥心が、快樂を押し上げて……

「んつ、んんつ……」

私はその熱に浮かされたように、とろとろに濡れた襞を擦り、自分の指をぐつと沈めた。

「んあ……っ！」

指に、ぱくりと勃たがつた芽が触れる。一番敏感なココを、くりくりっと弄る……だけ……で……ふああ……！

「あつ、ああつ……」

ゾクゾクッと、快感が走つて。

「ひつ……うあ……」

私は呆氣なく、自慰で果ててしまつた。

「ああ……」

それまではただ快樂で頭がいっぱいだつたけど、ふいにすうつと熱が引いていく。後に残るのはどうしようもない罪悪感。私はひつくと泣き出してしまつた。

「千鶴さん……」

旦那様の前で、こつ、こんな……！

自分の指で弄つてイクとか、どんだけ淫乱だよ自分！ と、己へのがっかり感で胸がいっぱいになる。

泣きじやくる私に、正宗さんは心底申し訳なさそうに「ごめんなさい、意地悪しましたね」と謝つてくれた。そして、そつと抱き締めてくれた。

「ごめんなさい、千鶴さん」

「うつ、ひつく……」

「あなたが可愛くて、つい苛めてしまいました。ごめんなさい」「うう……」

いや、あの、私も悪いですから。

というか、な、泣いちやつてごめんなさい……！

でも涙はすぐに止まらず、私は正宗さんの腕の中でぐずぐず泣いてしまう。

そんな私をあやすように、正宗さんは優しく背中を撫でてくれた。どうやら、今日のSツッ気タイムは終了したようだ。

「今度は優しくしますから、許してくれませんか？」

「ん……」

許してくれませんか、だなんて。無理強いされたわけじゃないし、ただ、自分どうし

ようもないな！ って気持ちが極まつただけで……

正宗さんは悪くないです。確かに意地悪だつたけど、そんなところも……

「大好き……」

「千鶴さん……」

「あつ」

もう一度、キス。深く深く、貪るようなキスだつた。

「なんでそんな……。優しくするつて言つたのに、できなくなりますよ……」

キスをしているうちに、私は長座布団の上に押し倒されていた。

まつばの私とは違い、正宗さんはだけた浴衣を纏ついて……エロい。

正宗さんの瞳に、情欲の熱が宿っている。それが、なんだか嬉しくて……この人に、そういう目で見られることが無性に嬉しくて。

私はついつい調子に乗り、意地悪を言った。

「……だめ、です。優しく、して？」

「つ……！ 善処します」

もう辛抱できない、と言わんばかりの正宗さんが、それをぐつと堪えようとしている。

そんな姿にゾクゾクッと感じてしまう私は、Mツ気だけじゃなくSツ気もあるのかもしれない。

正宗さんはいつたん身を離すと、テーブルの上の小さなパッケージを手に取った。コ

ンドーム、避妊具だ。

優月を授かるまではほとんど使つていなかつたけれど、生まれてからは着けるようになっている。優月が赤ちゃんの頃はお世話が大変で、とても二人目を育てる余裕なんてない！ と思って、避妊するようにしていたのだ。

そしてそのままするすると、今に至る。二人目を作る気がまったくないわけではないんだけど、なんとなく……踏ん切りがつかないというか。

正宗さんはすっかり勃ち上がり、準備万端な自身に（準備万端言うな！）、するする

とゴムを装着する。手慣れたもので、あつという間だ。

「んっ」

そして先端をぴたりと秘所に宛がい……

「んん……っ」

ゆっくり押し開くように、ナカに挿入つてくる。

「ああっ……」

彼の腰の動きは緩やかで、まるで私を労わるよう。

お願いした通りに優しくして下さる旦那様に、私は愛しさが込み上げてくるのを感じた。

「ぎゅって、して……」

繫がつたまま、私は両腕を伸ばして正宗さんに抱き締めてほしいとねだる。

彼は私をぎゅっと抱き締めてくれた。すると、正宗さんとともに奥まで繫がる。

「んっ！ あっ……」

だめだ。気持ち良くて、大きな声を出してしまいます。

でもあんまり大きな声を出したら、寝室まで聞こえてしまう。優月は眠っているけれど、この声で起きてしまったら……。こんなところを、見られてしまったら……

(それはダメ！)

私はぐっと唇を噛んで、声を堪えた。そうしたら、それを察した正宗さんが苦しそうに言う。

「つ、千鶴さん……、俺の肩を噛んで堪えて下さい」

で、でも噛んだら痛いし、痕が残っちゃうし……！」

躊躇う間に、正宗さんは壯絶な色気を纏った微笑を浮かべて。

「俺にも痕、残して下さい」

びぎやああああああああああああああああああああ！！

も、もうつ、なんのこの人！

三十も半ばを過ぎて、ますます色気を増すとか……！

うちの旦那様はまさに今、男盛りのご様子です。ハイ……

結局、正宗さんの左肩に小さな歯型をつけることになりました。

それから三度、四度と交わり……（ええ、正宗さんの精力は今も衰えておりません）、
気付けば私は長座布団の上でぐったりです。

お仕事が忙しかったり子どもの世話があつたりで、一人で暮らしていた時ほど嘗み
の機会が持てなくなつた分、やるとなつたら長いし回数も多いのです。おかげで私は瀕

死状態です。

もう、動けない……

でも……

「千鶴さん、ごめんなさい。……愛します」

とても満たされたお顔で、旦那様がそう言つて下さるから……：

（……私も……）

愛しい……のです。

幸せ……なのです！……つて、盛大に惚氣のろけましたすみません!!

立ち読みサンプル はここまで